

豊明希望チャペル礼拝

2021/9/19

ヨハネの福音書 7 : 25~36

「キリストの来られるとき」

今日の箇所は先週の続きで、イエス様がエルサレムに出られて、イエス様が、「良い人だ」「違う」などの評価、義論の真っ直中に身を置かれています。また、ずいぶん難しい律法の義論にも真正面から挑(いど)まれました。今日の箇所では、群衆が、為政者(サンヘドリンの議員)の、イエス様をおとしめる思惑(おもわく)にまで言及し、イエス様は、そんな彼らに、:28「・・・大きな声で言われた」と、:32「パリサイ人たちは・・・小声で話している」のと比較して、どうどうと真正面から、ご自身が誰であるかを、あの「いのちのパン」のメッセージよりも、さらに直裁(ちよくさい)に、真正面から語られた様子が出てまいります。

それがどんなに、イエス様にとって危険な事であったか、25「彼らが殺そうとしている人ではないか。」とか、:30「人々はイエスを捕らえようとした・・・」:32「捕らえようとして下役たちを遣わした。」とか、そういう言葉が出てきて、非常に危険な状態になってきたという、そういう箇所になります。

前回同様、少し長い箇所なので、早速、御言葉に添って見ていきたいと思いません。

「7:25 さて、エルサレムのある人たちは、こう言い始めた。「この人は、彼らが殺そうとしている人ではないか。7:26 見なさい。この人は公然と語っているのに、彼らはこの人に何も言わない。もしかしたら議員たちは、この人がキリストであると、本当に認めたのではないか。7:27 しかし、私たちはこの人がどこから来たのか知っている。キリストが来られるときには、どこから来るのかだれも知らないはずだ。」

少し、解説しながら、今日の箇所を見ます。ここで、彼らの言っている事はこういうことです。「あれ、有名人来てるよ！さすが都会だね。あの人は、イエスといったな、たくさんの病の人を癒したとか・・・ガリラヤでは大評判らしいよ。でも、ウワサでは、当局の議員達が、彼が、自分をいのちのパンと言って、メシヤだ神だと言っている事で、彼を殺そうと画策していると聞いているよ（:25）。なのに、このように、おもてを堂々と歩いていると言うことは、議会も、彼をキリスト(すなわちメシヤ)だと、認めたということか？・・・でも、我々、庶民でも、ローマに支配されて、この世も末で、そろそろ救世主が来てくれないかなあと、自分たちなりに聖書を調べていると、メシヤは、ダビデの故郷からという人もあるし、どこ出身ということがわからない、まさに天から来たんだという、神秘的な秘密をもった人だとそういう理解なんだけどなあ・・・(:27) いずれにせよ、彼、ナザレでもなく、エルサレムからは遠い(120キロ)、ガリラヤで、しかもそのガリラヤの中

心都市、テベリヤとかじゃなくて、そこから山に入った、ナザレらしいよ。お国が知れてるとはこの事だよ。メシヤ？ありえないよね。

民衆は、イエス様に非常に興味を抱きながら、良い人なのか悪い人なのか、メシヤなのか、決めかねているという様子です。

しかしそれにしても、人は、やはり見た目で判断するのです。その素性とか、学歴とか・・・そういうもので。昔から変わらないですね。イエス様は、:24「うわべで人を裁かないで、正しいさばきを行いなさい。」と言われましたが、人の判断は、うわべがすべてなのですね・・・

こんな聖句があります。

「ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る・・・」(ミカ 5 : 2) という見方です。あるいは、こういう聖句です。「ユダヤ人とギリシヤ人との区別はありません。同じ主が、すべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあられるからです。」(ローマ 10 : 12)

血筋が良いから、学歴があるからではない。血筋も実力もないけれど、神様が私を選んで下さったから良いという価値観です。そこには、選んだ方が素晴らしいから私は良いという考え方があります。これは、特に当時、異邦人が見たことも聞いたこともなかった価値観でした。

ですから、イエス様も、言われるのです。

「7:28 イエスは宮で教えていたとき、大きな声で言われた。「あなたがたはわたしを知っており、わたしがどこから来たかも知っています。しかし、わたしは自分で来たわけではありません。わたしを遣わされた方は真実です。その方を、あなたがたは知りません。7:29 わたしはその方を知っています。なぜなら、わたしはその方から出たのであり、その方がわたしを遣わされたからです。」

「わたしはその方から出たのであり、その方がわたしを遣わされたからです。」と。

また、イエス様は、ここで、自分が神から遣わされたキリスト、救い主、神だと言っておられるのです。

この書の著者ヨハネは、特にイエス様が、自信を持って「自分がメシヤ」だ、神だと、堂々と言われているというところに焦点を当てます。

ヨハネは、「自分で神だ」と言えない人を信じる事ができるだろうか、イエス・キリストは、勝手に弟子や教会が祭り上げた神ではなく、ご自身、そのように公言された、正真正銘のメシヤであって神だと言っているようであります。

良く見て下さい。「大声をあげて言われた。」と言うのです。

堂々たる、神の子宣言、神宣言をしておられるのです。聖書を知らない人は、良く読まないで、キリストも自分が神だと言っていないよね・・・みたいな事をいう人が時々いますが、何を根拠にそう言っておられるのか私にはわかりませんが、まあ、見事なものです。どうどうたるものです。

先に進みます。30 節以下です。

「7:30 そこで人々はイエスを捕らえようとしたが、だれもイエスに手をかける者はいなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。7:31 群衆のうちにはイエスを信じる人が多くいて、「キリストが来られるとき、この方がなされたよりも多くのしるしを行うだろうか」と言い合った。」

為政者にとっても、一般民衆にとっても、先に読んだ 29, 30 のイエス様の言葉は、何の付度(そんたく)もない、「私は神だ、メシヤだ」とする、自らを神とする発言として理解されたようです。これは、即、死罪にあたる発言でした。為政者にとっては、イエス様をとらえる明確な根拠が出来たわけです。それで「捕らえようとした」わけですが、手をかけられなかったというのです。というのは、群衆の心が揺れているからです。群衆からは、とにもかくにも、あのような業をなさる人を見たことも聞いたこともないし、考えることも出来ないと考える人たちが相当数いたのです。

それで、為政者は、いわば、裏工作に入ります。まずは、賛同がえられないなら、密かに事を進めちゃおうという事で、関係者、すなわち、役人を遣わして捕らえようと考えたのです。

「7:32 パリサイ人たちは、群衆がイエスについて、このようなことを小声で話しているのを耳にした。それで祭司長たちとパリサイ人たちは、イエスを捕らえようとして下役たちを遣わした。」のです。

・・・ところがどうも、遣わした役人が、実際に会ってみると、イエス様に感動してしまって、45 節を見ると、その役人達が、「: 46 これまで、あの人のように話した人はいませんでした。」と、やっぱり彼は本物だと思うんですね・・・て、報告したのです。

イエス様は、為政者達、特にパリサイ人らの心の内を読んでいました。最後まで読みます。

「7:33 そこで、イエスは言われた。「もう少しの間、わたしはあなたがたともにて、それから、わたしを遣わされた方のもとに行きます。7:34 あなたがたはわたしを捜しますが、見つけることはありません。わたしがいるところに来ることはできません。」7:35 すると、ユダヤ人たちは互いに言った。「私たちには見つかからないとは、あの人はどこへ行くつもりなのか。まさか、ギリシア人の中に離散している人々のところに行って、ギリシア人を教えるつもりではあるまい。7:36 『あなたがたはわたしを捜しますが、見つけることはありません。わたしがいるところに来ることはできません』とあの人が言ったこのことばは、どういう意味だろうか。」」

前回に引き続いて、ヨハネは、交わされた議論の詳細を伝えます。

もしかしたら、イエス様についての様々な議論が、ヨハネの生きていた、使徒達が次々と教会を建てていった初代教会時代にも続いていた議論なのかも知れません。

ここで言われている事は、まず、イエス様がおっしゃられたことは、簡単に言えば、私があなた達とられるのは、もうしばらくしかない。いつまでも救いのチ

チャンスがあるわけではない。機会を逃すと手遅れになる。今、私に向かい合いなさい。そして信じなさい、そう言われています。

ちなみに、35 節以下のユダヤ人の発言というのは、「わたしがいる所に、あなたがたは来ることができません。」と、神の所にいるから、あなたたち人間は、近づけないという意味ですが、それを誤解して、海外に逃れるつもりか？と思ったと言うことです。ユダヤ人のとところを去って、ギリシャ人とかに教えるつもりか・・・と思ったと言うことです。

さて、エルサレムに入り、ついには、時の為政者にまで向かい合われたイエス様のことを見てきました。また、ここを俯瞰(ふかん)に見ると、31 節までの前半は、イエス様がどこから来たのかという事が問題になった。そして、32 節以降は、イエス様が、どこに行かれるのかということが問題になっています。

どこから来て、どこへ行くのか。この重大な問いにイエス様は、答えられたということです。イエス様は、どうおっしゃられたのでしょうか。それは、神から来て神に行くという事でした。

そして、今日、最後に教えられたことです。それは、私たちはどうかという事です。

私達クリスチャンは、神を信じて、神の子とされた私たちは、生まれる前から神に選ばれ、この地上に存在をゆるされたということです。どんなハンディキャップをもっていても。これは、大声で叫ばなければならない告白なのです。人におまえは能力がないから要らないと言われようと、自分でそのように思おうと、大声で叫ばなければならない。私は神に望まれてここにいると。

そして、どこに行くのか。神様が、私を天の神のところに召してくださるということです。ある人がこう言いました。

「人間は、使命が終わって死ぬまで決して死なない。必ず生きる。」と。当たり前と言えば当たり前の言葉ですが。神が許さないと死なないということです。「人間は、使命が終わって死ぬまで決して死なない。」それは、仮に短くてもという事です・・・短いけれど、神に許された時間を生ききったのだ。周りの人を幸せにし、短くても最高の日々を生ききったのだと必ず言えるとい言う事ではないでしょうか。

30 節に、「・・・イエスの時が、まだ来ていなかったからである。」とあります。「時が、まだ来ていなかった」と。

時が来なければ、私には、誰も手を出せないという意味ですが、それは、同時に、私たちクリスチャンにしても、同じだと思うのです。パウロは、40 人の刺客に追われ、暗殺計画の中でも、神を信じ、私は必ずローマに行くと確信し、殺人者達の間をすり抜けるようにして、ローマに到達しました。私達は、死を恐れる必要のないのです。時が来なければ死なない。そして、時が来れば、神様は、神様にとって一番良い時に、それは同時に、私達の一番良い時に召して下さるのです。

この週。私の能力でも素性でもなく、ただ、選んで下さった方の素晴らしさのゆえに、栄光をいただいている者として、神は偉大だ、キリストは最高だ、キリス

トが生まれたと、ここから叫び声をあげつつ出て行かせていただきたいと願います。